あなたと博物館

No.252
2025.6.15

特集：松本市立博物館　令和７年度特別展
「地獄の入り口 ―十王のいるところ―」

松本市立博物館特別展

地獄の入り口

ENTRANCE TO

HELL

Where the Ten Kings Are

―十王のいるところ―

Matsumoto City Museum

松本市立博物館　令和7年度特別展

2025.7.5 sat ▶ 9.1 mon

「地獄の入り口 ― 十王のいるところ ―」

「嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれるぞ」――子どものころ、大人にこう言って叱られたことはありませんか？日本では昔から、地獄の裁判官である閻魔王に怒られたり地獄に落とされたりしないよう、悪い行いを戒めてきました。

実はこの裁判官、閻魔王だけでなく、総勢10人の王で構成されているのをご存じですか？

本展では、松本市内に伝わる文化財を中心に、日本の地獄の風景と、閻魔王率いる10人の王・十王の姿を紹介します。

憤怒の表情を浮かべる閻魔王
閻魔王像　木造　　堂村町会蔵

地獄の裁判官・十王の姿

十王は、仏教において死後の亡者を審判するとされる10人の王です。

インドで誕生した「ヤマラージャ」という神様を起源とする閻魔王が仏典とともに中国へと伝わり、中国の冥界観などと融合して十王が誕生しました。その後日本へ伝わった十王は、地獄を司る恐ろしい存在として、そして地獄行きから救ってくれる存在として受け入れられました。

我々を裁く裁判官・十王はいったいどのような姿をしているのでしょうか。

「地蔵十王経」
江戸時代　版本　当館蔵

長野県宝　絹本著色地蔵十王図のうち閻魔王幅
15世紀　駒ヶ根市・光前寺蔵

地獄をのぞく

十王を語る上で、「地獄」は欠かすことができません。

地獄は、生きとし生けるものが輪廻転生（りんねてんせい）する６つの世界「六道」の中でも最下層の世界です。ここに落とされるとどのような責め苦が待ち受けているのか…。思わず目を背けたくなる凄惨さと、一度見たら目が離せなくなる不思議な魅力が同居する地獄の世界をのぞいてみましょう。

地獄絵図（部分）
江戸時代　紙本著色　林照寺蔵

松本の十王が大集合

亡者を裁き、罪人を地獄に落とす恐ろしい存在、十王。

一方で、町の守り神として人々を守ってくれる十王、子どもの遊び相手になった十王、あの世へ旅立つ人を見送る十王…。この世でもさまざまな表情、さまざまな性格の十王に出会うことができます。この度、そんな彼らに大集合していただきました。

ただ恐ろしいだけではない、時に厳しく、時にやさしく、人々を見守る十王の眼差しを感じてください。

（松本市立博物館　学芸員／武井）

長野県宝　木造奪衣婆坐像
松本市重要文化財　地蔵菩薩半跏像
松本市重要文化財　十王像　附　司命司録
室町時代　木造　牛伏寺蔵

昭和のくらし　～人々の生活道具とその変容～

はじめに

今年令和7年（2025）は昭和元年から数えてちょうど100年目にあたります。

昭和は戦争から戦後の復興期を経て、高度経済成長、バブル経済と激動の時代でした。現在では国民の約7割が昭和生まれ、約3割が平成以降の生まれとなり、昭和を知らない世代も増えています。時代や世代間の価値観の変化を「昭和100年」というキーワードから見直す機運が高まっています。

1　旧山辺学校校舎の展示

当館には社会科「昔のくらし」の学習などで小中学生が来館されます。その目的は、収蔵している民俗資料を通じて、先人の生きるための知恵と工夫を学ぶことにあります。第5室「農家の暮らし」には、明治期から昭和の初めをイメージした農家の住まいが再現展示されています。そこにあるのは電気やガス、水道が普及する前の道具たちです。ご飯を炊くための「かまど」、薪をストックしておく場所「きじろ」、火を燃やし団らんするための場所「囲炉裏」、飲み水を溜めておくための「水がめ」、冬の暖房器具「火鉢」など、すべては絵本の昔話でしか知らない未知の道具たちなのです。

タブレットを用いた学習風景（第5室「農家の暮らし」）

2　博物館資料としての収蔵基準

最近、代替わりで家屋の取り壊しをする市民の方々から、博物館へ問い合わせや相談が増えています。「蔵を壊すので貴重なものかどうか調べてほしい」「両親が大切にしていた道具を破棄してしまうのは忍びない」などといった電話が寄せられます。そのような依頼があると博物館の学芸員が調査に出向きデータを収集します。その後資料を持ち寄り、その価値を審議したうえで寄贈の運びとなります。その基準は収集取扱内規により定められています。そこには、研究及び展示などで活用が見込まれるか、歴史的に重要な資料と認められるかなどいくつかの項目があります。例えば、絵画。いくら著名な海外の画家の作品であっても、館の収蔵方針や地域の生活と結び付いた作品でないと収蔵に値しないのです。またもう一つの例を挙げると、地域の災害を守ってきた竜吐水（りゅうどすい）（手押しポンプ）は、収蔵スペースの問題も加味し、類似品が既にあるということでお断りせざるをえないケースもありました。

3　新たな収蔵テーマ「昭和のくらし」

昔のくらしを学習に来館される児童・生徒にとって、自分たちの祖父母が過ごしてきた昭和という時代は既に遠い昔の世界です。そんな時代背景もあり今注目されているのが、昭和の生活を体系的に見直す動きで、全国の博物館施設で重要な研究テーマになっています。昨年度から当館でも、昭和のくらしを彩った生活道具の収蔵に向け調査を始めています。

4　昭和を彩った生活のマストアイテム テレビ

昭和30年代に電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビは「三種の神器」と呼ばれ普及していきました。現在、当館でも昭和30年代から40年代の茶の間（居間）をイメージしたブースが形になってきました。当時、茶の間の中心に君臨していた家電は白黒テレビ。一家団欒（だんらん）という響きに呼応するマストアイテムです。テレビを中心に家族全員が集い時間を共有していました。総務省の調査によると、白黒テレビが家庭に普及したのは昭和30年代。映画「ALWAYS 三丁目の夕日」でも、テレビが運ばれてきた日の家族の高揚感が象徴的に描かれています。昭和30年（1955）の受信可能世帯は全国で約36%、それが5年間で約79%と急拡大したそうです。今回寄贈していただいたブラウン管テ

レビは、昭和39年（1964）東京オリンピックに合わせて購入されたとお聞きしました。この年の白黒テレビの普及率は90%を超え、まさに高度経済成長を象徴する生活の道具といえます。

昭和30年代から40年代をイメージした再現ブース

5　思い出の詰まった「足踏みミシン」

新聞紙上などを通じて昭和の道具を募ったところ、多くの反響がありました。街の電気屋さんをはじめ、松本近郊の市町村の方々から30件以上の情報が寄せられました。その中で一番問い合わせが多かったのがなんと「足踏みミシン」でした。

ミシンの普及は明治時代から始まりますが、当時は輸入品でした。大正期になり国内での量産が開始され、終戦直後は繊維製品が主要な輸出品となり、内職で家庭を支える家も多くありました。昭和40年代に入り、足踏み式や手回し式ミシンが主流となります。当時は洋裁を習う女性も多く、洋裁学校も市内に多くありました。調査では「母親がブラウスを作ってくれた」「嫁入り道具として持参した」などエピソードを熱く語ってくれました。

処分に踏み切れないのは、金属と木材の複合体で重量があり嵩張るという物理的な理由だけでなく、思い出が詰まったアイテムだからです。

現在、制作中の昭和再現ブースでのこと。ご婦人が茶箪笥に収められていた大相撲の湯呑を見つけ、ご主人と一度だけ行った国技館での本場所の思い出を語ってくれました。博物館資料は高齢者介護の現場でも実践されている「回想法」の視点からも活用が期待されています。

おわりに

最近「昭和レトロ」という言葉をよく耳にします。年配の人には懐かしく、若い人には新鮮な響きがあると聞きます。昭和時代を過ごした大人たちが懐かしく感じるのは分かるのですが、昭和を知らないZ世代に刺さるのはなぜでしょうか。

昭和の時代に当たり前にあった、どこか温もりのある人とのつながりに憧れを抱くのかもしれません。55年前に行われた大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」。そして昭和100年の今年開催されている万博のテーマは「いのち輝く」。昭和のくらしを再検証することは、これからの私たちの未来の生活を考えることにつながるのではないでしょうか。

（旧山辺学校校舎　学芸員／大島）

調査時の足踏みミシン

【参考資料】
吉田博嗣「私の視点 観光羅針盤457」昭和100年から考える幸福論
観光経済新聞　2024（令和6）年12月30日付
NHKアーカイブス

松本市歴史の里 Tel.0263-47-4515

連続講座「なぜ松本で普通選挙運動がおきたのか」第1回を終えて

1　はじめに

大正14年（1925）に（男子）普通選挙法が成立して今年で100年を迎えます。

普通選挙法成立となった衆議院議員選挙法改正に先立つこと28年、明治30年（1897）に日本で最初の普通選挙運動がここ松本の地でおこりました。その普選運動の中心となったのが、現在の山形村出身の中村太八郎と現在の松本市出身の木下尚江でした。

「普通選挙運動発祥の地」である松本で、普通選挙法成立100年となる今年、改めて当時の人々の普通選挙に対する思いを学び、その意義を考える連続講座を市民学芸員「歴史の里あゆみの会」が企画し、4月13日に第1回目の講演会が開催されました。

その講演会の様子をご紹介します。

2　松本における普通選挙運動のおこり

簡単に松本でおこった普通選挙運動についてまとめます。

明治22年（1889）に大日本帝国憲法の発布とともに衆議院議員選挙法が制定され、国民が選挙により国政に参加することが可能となりました。しかし、投票権を得るには「直接国税を15円以上納税した満25歳以上の男子」という要件があったことから、有権者数は全人口の約1.1%にすぎませんでした。

選挙がごく一部の人によって行われていたなか、明治30年、中村太八郎や木下尚江は「普通選挙期成同盟会」を結成し、松本の緑町に事務所を開きます。同盟会の結成に際し、木下尚江は日本で最初の普選実現運動の宣言である「選挙を請願するの趣意」を発表しました。東京で「普通選挙期成同盟会」が創立されるのは、松本で普通選挙期成同盟会が発足した2年後のことです。東京の普通選挙期成同盟会の中心となったのも中村太八郎でした。

松本での普通選挙運動は、結成直後、期成同盟会の中心人物であった中村太八郎と木下尚江が東筑摩郡の県会議員選挙に関して恐喝詐欺取財犯として逮捕されたことにより、中断を余儀なくされてしまいます。（その後、明治32年に再興）

3　なぜ松本で普通選挙運動がおきたのか

今回の連続講座で講師を務めていただくのは、今井公民館の文化委員である桜井政男氏です。第1回目の講演会となる今回は、「なぜ松本で普通選挙運動がおきたのか」をテーマに、幕末に信州でおきた出来事や、寺子屋を中心に信州で教育が普及していたこと、松本で結成された奨匡社の活動など、後に普通選挙運動へとつながっていく人々の営みについてお話しいただきました。

多くの方にご参加いただき、参加された方から多くの質問が出されるなど、とても活発な講演会になりました。

4　今後の講座

第1回目は松本で普通選挙運動がおこる、その前段までのお話しが中心となりましたが、第2回目以降は、普通選挙運動における中村太八郎や木下尚江の活躍などについてお話しいただく予定です。

普通選挙法成立100年の今年、秋頃まで続く連続講座です。

多くの方にご参加いただき、改めて「普通選挙運動発祥の地　松本」を学ぶ機会となればと考えています。

（歴史の里　学芸員／須永）

講座の様子

講座の様子

窪田空穂記念館 Tel.0263-48-3440

企画展「近代と文藝－空穂が見た明治の文学運動」

今秋の窪田空穂記念館では、企画展「近代と文藝－空穂が見た明治の文学運動」を開催いたします。文学史において、明治という時代は国家の近代化と共に、それまでとは全く異なる文学が生み出された時代です。また、文豪と呼ばれる大作家たちが綺羅星（きらぼし）の如く活躍したまさに文学熱の時代でした。

明治10年（1877）生まれの歌人・窪田空穂も松本中学校（現・松本深志高校）在学中から文学に親しみ、近代ロマン主義の先駆者として知られる詩人・北村透谷や、木曽馬籠出身の詩人・作家の島崎藤村らが創刊した文芸雑誌『文学界』を愛読しました。その後文学の道を志し、歌人・与謝野鉄幹に見いだされ、22才の時に東京専門学校（現・早稲田大学）に再入学するため上京します。在学中に仲間と文芸雑誌『山比古』を創刊し、詩歌のほか初めて小説を執筆しています。歌人として知られている空穂ですが、明治30年代後半には作歌よりも小説に惹かれて次々と作品を発表しており、明治40年（1907）頃になると新進気鋭の小説家の一人にも数えられました。折しも文壇では自然主義文学の嵐が吹き荒れ、それまでの小説の価値基準を一変させた国木田独歩の『運命』（明治39年）の発刊を皮切りに、島崎藤村や田山花袋などが次々に新しい時代にふさわしい小説を発表します。この頃空穂は、終生の友人であった吉江孤雁（こがん）や前田木城（もくじょう）を介し、明治の文士たちと交流しながら文芸活動に邁進しました。

本展覧会では、明治時代に起こった新しい文学のムーブメントの渦中に身を置きながら、青年期の空穂が何を見て、何を吸収していったのかを探ります。

また、明治時代に出版された文芸雑誌や書籍（復刻版有）の展示も見どころの一つです。新しい時代を彩る美しい装丁をたっぷりご堪能ください。

会場では同時開催として、近年当館に収蔵された資料を公開する「最新収蔵資料公開展2025」を開催いたします。ここでは戦後80年の節目の年を考えるのにふさわしい資料として、昭和20年（1945）に書かれた自筆歌稿「疎開地にて」を展示いたします。

終戦間際の昭和20年3月、空穂は松本へ疎開をしています。同年4月に書かれた歌稿の22首の歌からは、“疎開びと”となった空穂の日々の心の揺れ動きが伝わってくるようです。

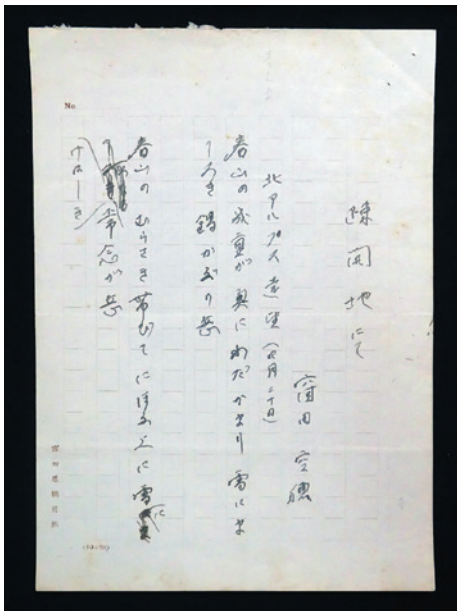
これらの歌は歌集としてまとめられ戦後に出版されますが、歌稿に記されていた戦事詠は削除されたため、一部の研究者以外にはあまり知られていません。それらの歌には敗戦を予感させ、身を奮い立たせるも老いた身に迫る恐怖や不安がぬぐえない、戦争と対峙している老境の空穂のリアルな実感が如実に表れています。

今年は深まりゆく空穂生家の秋の庭園を眺めながら、文学の世界に浸ってみるのはいかがでしょうか。

（窪田空穂記念館　学芸員／會田）

窪田空穂　歌集『明暗』
金曜社、明治39年7月

雑誌『文章世界　第1巻第5号』
博文館、明治39年7月



自筆歌稿『疎開地にて』昭和20年

企画展「近代と文藝－空穂が見た明治の文学運動」

［会 期］　9月5日㊎～10月27日㊊
午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
※火曜休館（祝日の場合は開館し翌日休館）
［会 場］　窪田空穂記念館
［料 金］　無料

ひとの動き

4月1日付で、職員の転入・転出等がありました。（　）内は所属。

転入・新規採用　よろしくお願いします。

主事	西松	（都市計画課→旧開智学校校舎）
会計年度任用職員(館長)	百瀬	（本郷図書館→松本民芸館）
会計年度任用職員(館長)	武井	（内田地区地域づくりセンター→歴史の里）
会計年度任用職員(館長)	牛丸	（松原地区地域づくりセンター→四賀化石館）
会計年度任用職員	佐藤	（考古博物館）
会計年度任用職員	杉田	（はかり資料館）
会計年度任用職員	牧垣	（はかり資料館）
会計年度任用職員	佐竹	（旧制高等学校記念館）

退職・転出　お世話になりました。

主事	小林	（時計博物館→保険課）
会計年度任用職員(館長)	手島	（松本民芸館→里山辺公民館）
会計年度任用職員(館長)	中嶋	（歴史の里→退職）
会計年度任用職員(館長)	青木	（四賀化石館→本郷図書館）
会計年度任用職員	宮澤	（はかり資料館→退職）
会計年度任用職員	遠山	（はかり資料館→退職）
会計年度任用職員	木原	（旧制高等学校記念館→退職）

課内異動　改めてお願いします。

主査	遠藤	（旧開智学校校舎→市立博物館）
主事	吉澤	（市立博物館→時計博物館）

ガイドコーナー　はんてんぼく

※申込み・問合せは各館へお電話ください

展示スケジュール

※4月から各館の料金・休館日が変更になっています。
詳細はホームページでご確認ください。https://www.matsu-haku.com/　まる博　検索

館名称	7月	8月	9月
松本市立博物館	■特別展「地獄の入り口―十王のいるところ―」 7月5日㊏～9月1日㊊		
窪田空穂記念館			■企画展「近代と文藝―空穂が見た明治の文学運動」 9月5日㊎～10月27日㊊
馬場家住宅	■季節展示「七夕人形が揺れる縁側」 7月5日㊏～8月11日㊗		

松本市立博物館から　☎0263-32-0133

特別展「地獄の入り口 ―十王のいるところ―」

会　期　7月5日(土)～9月1日(月)
　　午前9時～午後5時(入室は午後4時30分まで)
会　場　松本市立博物館2階特別展示室
閉室日　毎週火曜日
　　※祝日の場合は開館し翌日休館
観覧料　[特別展単独券]
　　大人1,100円(900円)
　　大学生800円(700円)
　　高校生以下無料
　　[常設展セット券]
　　大人1,300円(1,100円)
　　大学生1,000円(900円)
　　高校生以下無料
　　※(　)内団体20名以上料金

〈関連事業〉

●講演会①「松本城下町と十王堂」
日　時　7月19日(土)
　　午後1時30分～3時
会　場　松本市立博物館　講堂
定　員　80名程度　※QRコードより
　　お申し込みください
料　金　無料
講　師　後藤　芳孝氏
　　(元松本城管理事務所研究専門員)

講演会②「近世の宗教美術 ―十王像と地獄絵を中心に―」
日　時　8月23日(土)
　　午後1時30分～3時
会　場　松本市立博物館　講堂
定　員　80名程度　※QRコードより
　　お申し込みください
料　金　無料
講　師　矢島　新氏(跡見学園女子大学　教授)

お盆の夜に十王まいり～夜間特別開館～

日　時　8月9日(土)～8月17日(日)
　　各日午後5時～7時(入室は午後6時30分まで)
会　場　松本市立博物館2階特別展示室
閉室日　火曜日
料　金　本展観覧料

担当学芸員によるギャラリートーク

日　時　7月12日(土)、8月9日(土)
　　両日とも午後1時30分から
会　場　松本市立博物館2階特別展示室
料　金　本展観覧料

旧制高等学校記念館から　☎0263-35-6226

第28回夏期教育セミナー

「生徒自治って古い? ―学校における生徒自治の歴史とこれから」をテーマとして、講演会や研究発表会を行います。

日　時　1日目　8月30日(土)　午後1時～5時
　　講演会
　　講師　井上　義和氏、加藤　善子氏
　　(『深志の自治』の編著者)
　　2日目　8月31日(日)
　　午前9時30分～午後0時30分
　　研究発表会
会　場　あがたの森文化会館　講堂ほか
料　金　無料

窪田空穂記念館から　☎0263-48-3440

企画展「近代と文藝―空穂が見た明治の文学運動」

会　期　9月5日(金)～10月27日(月)
　　午前9時～午後5時(入室は午後4時30分まで)
休館日　毎週火曜日
　　※祝日の場合は開館し翌日休館
料　金　無料

馬場家住宅から　☎0263-85-5070

季節展示「七夕人形が揺れる縁側」

会　期　7月5日(土)～8月11日(月祝)
会　場　重要文化財馬場家住宅　主屋・坪庭
休館日　毎週火曜日
　　※祝日の場合は開館し翌日休館
料　金　無料

旧山辺学校校舎から　☎0263-32-7602

昔の遊び道具作り教室

昔のおもちゃを手作りします。子どもから大人まで楽しめる教室です。

日　時　6月15日(日)午前9時～正午
会　場　教育文化センター　206会議室
定　員　20名　※全年齢対象
　　(小学校低学年以下は保護者同伴)
料　金　無料
講　師　荒田　直氏、青柳　秀人氏
持ち物　筆記用具、はさみ
申込み　6月6日(金)午前9時から
　　旧山辺学校校舎へお電話ください

時計博物館から　☎0263-36-0969

夏季特別展「昭和100年記念 昭和を刻んだ時計たち」

令和7年は昭和元年(1926)から100年の節目を迎える年にあたります。昭和100年を記念し、当館所蔵の時計コレクションを中心に昭和の日本を振り返ります。

会　期　7月26日(土)～9月7日(月)
　　午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
会　場　時計博物館　3階企画展示室
観覧料　通常観覧料
　　(大人500円　小中学生200円)

あとがき

博物館への勤務も２年目となり、いくつかの特別展の準備に関わってきましたが、多くの人の手によって展示が成立していることに改めて驚かされます。いずれの企画も主担当となる学芸員の専門性が発揮され、各々の魅力が光る展示になっています。本年度も何卒よろしくお願い申し上げます。
(松本市立博物館　竹藤)

あなたと博物館 No.252
発行年月日/令和7年(2025)6月15日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0874 松本市大手3丁目2番21号
Tel.0263-32-0133
URL：https://www.matsu-haku.com/
e-mail：mcmuse@city.matsumoto.lg.jp
印刷　川越印刷株式会社
松本市立博物館
Matsumoto City Museum